

桜が丘中学校 生活だより

釧路市立桜が丘中学校 生徒指導部 No. 5 令和2年6月26日

エジソン 2万回の失敗

期末テストが近づいてきました。今年度はコロナ禍による休校もあり、テスト範囲が長いため、いつも以上に計画的な勉強が必要です。

一人の天才を紹介します。発明王トーマス・アルバ・エジソン。
その生涯における発明の数はおよそ1300とされています。

最も有名なのが白熱電球ですが、他にも電話機や蓄音機など数々の発明をしました。発電などの電気事業、映画を見たり、電話をしたり、音を記録したりすることができるのは、全てエジソンの功績です。

「夜でも昼のように、光で明るく照らされる世界をつくりたい」
そんな思いからエジソンは白熱電球を発明しました。
もちろん最初から上手くいったわけではありません。
長時間、電気を出し続けるためには、フィラメントという、電球の中の光る細い線が、電気を通して熱くなっても切れないことが必要でした。
フィラメントを何の素材にするのかが、一番の難題でした。
新しい素材を試しては失敗、また新しい素材を探して、試しては失敗…その繰り返しでした。

もし自分がエジソンなら、何回くらいあきらめずに挑戦できますか。

様々な説がありますが、エジソンは2万回近く実験を繰り返したとされています。
工場で手に入る材料では全部うまくいかなかったため、植物に目をつけます。
ブラジルのアマゾンの密林やフロリダの湿地など、世界中から植物を集め研究しましたが、ほとんどがうまくいきませんでした。
そしてようやくフィラメントに適したものを見つけました。
それは、日本の京都の岩清水八幡宮の竹でした。白熱電球の誕生には日本が大きく関わっていたのです。

こうして、「白熱電球」は生まれました。

初めて光を灯した1879年、3000人もの人が集まり、暗闇を昼のように照らす光に感動したといます。

このことは、新聞記事にも取り上げられました。

ある新聞記者が、エジソンに質問しました。

「何万回も失敗をして、あきらめることはなかったのですか？」

エジソンは何と答えたでしょうか。

あれは、失敗ではありません。
上手くいかない方法を一つ一つ確かめたのです。
あきらめることが失敗なのです。

その挑戦の結果生まれた電球が、今も私たちの生活を明るく照らしています。
もしエジソンが1万回であきらめていたら、今の私たちの生活は暗闇のままだったかもしれません。

エジソンの有名な言葉。

「天才とは、1%のひらめきと、99%の汗である」
白熱電球を発明したエピソードが物語っているように、エジソンは上手くいかなかった実験の数々を「汗」と表現しています。汗をかくように、行動しなければ成功は得られないのです。
白熱電球1つですら2万回の実験をしたのですから、1300もの発明の裏にはきっと何千万回、何億回という上手くいかない実験があったと想像できます。
エジソンのように、多くの成功をしている人というのは、誰よりも多くの失敗をしていると言えます。あきらめて、挑戦をやめることが「本当の失敗」です。

エジソンは2万回もの挑戦をして、白熱電球を発明しました。
皆さんも同じです。何度もうまくいかない経験をして、それでもまた挑戦して、そうやって成長していくのです。
失敗や間違いをおそれず、何にでも挑戦して自分の可能性を伸ばしていく。そのような中学校生活を送りましょう。
挑戦した先には、成功か学びのどちらかしかないのです。